花凪屋繁盛記

連載25

人と人とがつながって

NPO法人在宅生活支援
サービスホーム花凪

木村美和子理事長

お願いですから、休んでください

一日からの開店三周年記念セールの準備に大わらわの店内で、これまた大わらわで働くミニデイ利用者と下宿人たち。来店したお客さんから

「随分楽しそうだと思ったら、働いているんだ」

と声を掛けられても、顔も上げずに手を動かし続ける面々。

またまた、そのお客さん

「遊びのように働くんだね」

それを聞いたAさん、キッと言うふうに顔を上げ

「冗談じゃないよ。わっちら働かないと、座る場所もないんだから」

私「そうそう、その通りでございます。よろしくお願いしますよ」

間髪入れずRさん

「三時のコーヒータイムは、休ませてくれるんですよね」

その次にKさん

「私は手が利かない分はかどってないから休みません」

瞬間、みなさん一斉に手を止め、

「いいですよ」

と言いながら顔をほころばす。

「なんて、働き者そろいなんでしょう」と、もうウットリ。

いつの間にかの役割分担

本当に、下宿人とミニデイの利用者は働き者ばかりで、

「一息入れましょう」

と声を掛けるまで休まないため、一息の入れ方にも工夫が必要となります。初めのころ、飴(あめ)をなめながら休みましょうとお渡ししたら、口に入れた途端手を動かし始めて、からね」

私は

「お茶は熱いですと言って座っているだけ。ちゃんと役割分担がいつの間にかできていて、誰もが当たり前のようにお茶を飲んでいます。

私は一度も強制したつもり(あくまで、つもり……なのですが……)はないのですが、気が付くとみなさん自分の意思で行動するようになっていました。

ルールがないのがルール

「花凪下宿」にはルールというものはありません。強いて言うと、「陰口は言わない。批判は本人の前で言う」

「ご飯の支度が調ったら、みんなそろって『いただきます』と言って食べよう」

と主張しました。しかし、何度言ってもほかの下宿人三人は完全無視。Kさんはみんなを説得するように私にうとすぐさまはしを持ち、大きな声で「いただきます」、食べ終わると「ごちそうさま」と言い、時々は「あぁおいしかった」と、おまけまで付けてくれていました。

Kさんは五年前に亡くなりました。最晩年は声が出なくなっていましたが、それでも口の中でブツブツ言い、手を合わせて食事を始めていました。

あの世にいるKさんは、相変わらず「おめぇがだらしないから、みんなだらしなくなるんだ!」

と、おしかりを受けてしまいました。確かにそういう考え方もあるのだろうけれど、

「花凪下宿」では下宿人たちに何かを強制したり、指示したりはしたくないのです。

結局その後も、みなさん、自分の流儀で食事を取っていましたが、あっぱれだったのはKさんで、食事が調ち、大きな声で「いただきます」、食べ終わると「ごちそうさま」と言い、時々は「あぁおいしかった」と、おまけまで付けてくれていました。

Kさんは五年前に亡くなりました。最晩年は声が出なくなっていましたが、それでも口の中でブツブツ言い、手を合わせて食事を始めていました。

あの世にいるKさんは、相変わらず「おめぇがだらしないから、みんなだらしなくなるんだ!」

と、おしかりを受けてしまいました。確かにそういう考え方もあるのだろうけれど、

働く花凪家族。〝働く〟は〝動く〟とは違う。生き生き働き、力を発揮し続けるのが人の生ということくらいでしょうか。

その中で、ルールを作ろうと果敢に挑んだのが一号館時代のKさん(ピアノの上から飛び降りた身軽な方です)でした。Kさんは、

「おめぇがだらしないから、みんなだらしなくなるんだ!」

と、おしかりを受けてしまいました。確かにそういう考え方もあるのだろうけれど、

しばしの思考もせずに、「こんなふうに自分の意思で生き生き働いている現下宿人たちの姿を見たら、絶対後者のように思っているよね。Kさん」と、またまた都合良く考える私なのでした。